酒々井町

郷土研究会会報

第146号

平成24年10月1日
酒々井町郷土研究会
広報部

酒々井の年輪

高木正浩

酒々井は歴史の香りの豊かな町です。有形無形のいろいろな文化財が歴史の年輪のように残っています。

本佐倉北大堀遺跡（スーパー・トライアル付近）から出土したナイフ形石器などから、酒々井には旧石器時代から人が住んでいたことがわかっています。約2万年前の日本列島では、十数人単位で生活していて、人口は5千人前後と考えられますので、その頃の酒々井は、とても住みやすいところだったのでしょう。

縄文土器や弥生土器が酒々井のところどころから発掘され、また、古墳がいくつも発見されています。

上岩橋の大鷲神社の神殿は、5世紀の円墳の上に建てられています。また、本佐倉の隣保館の傍らにある鬼塚古墳は、6世紀後半の前方後円墳ですし、総合公園の入口にある小盛田古墳は7世紀の方墳です。

戦国時代には、酒々井は本佐倉城の城下町として千葉氏を支え、江戸時代になると宿場町酒々井として、特に、文化・文政のころ成田詣が盛んになると賑わいを見せて、勝蔵院の不動明王と共に脚光を浴びました。

仏教は、飛鳥時代に百済から伝わり、奈良時代になると日本全国に国分寺が建立されて、鎮護国家の祈りがなされるようになりました。平安時代の初め、唐から帰国した最澄が天台宗を開き、空海が真言宗を開いて、衆生を救済する日本仏教の基礎を確立しました。

この時期に早々と酒々井では下岩橋の大仏頂寺、根古谷の吉祥寺が真言宗のお寺として創建されています。

酒々井町は東西4キロ・メートル、南北6キロ・メートルの決して広くないところですが、以来34のお寺が、また、神社は25社建立されていて、信仰の伝統を受け継ぐ墨・上岩橋・馬橋の獅子舞が文化財として指定されています。

酒々井には、古くから信仰の篤い人々が住んでいました。

上岩橋の長福寺の阿弥陀如来坐像＝写真＝は、この地方の豪族が中央の風に習って平安時代中期（後期）に造立されたと考えられ、脇侍の多聞天と持国天とともに県の文化財に指定されています。現在は無住寺となっていますが、檀家の方々がしっかりと守って居られます。毎年11月9日には公開されますので間近に拝むことができます。

掌を合わせて阿弥陀さまの温顔を拝していると、当時の郷の人々が一日の業を無事終えた感謝と明日の平和を願う祈りが伝わってきます。

昔から酒々井には平和を願う優しい心を持った人々が住んでいます。

「本佐倉城跡周辺の史跡と自然展」回顧録（三）

本佐倉城跡周辺の代表的な石仏

前田國廣・久我かず子

石仏は文字どおり、石で造られた仏であり、寺院の境内、墓地、路傍などに多く見られます。

酒々井町には、約一〇〇〇基あまりの石仏があり、その多くは江戸時代に人々の篤い信仰心によって、いろいろな願いごとを込めて造立されたものです。本佐倉城跡周辺にある代表的な石仏を紹介します。

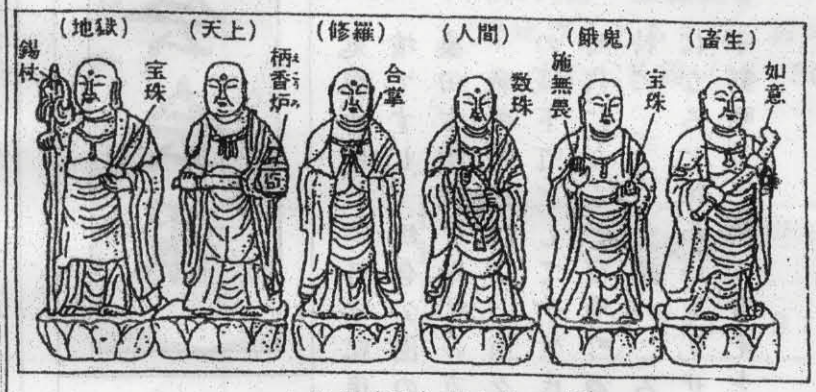
散策時の参考になれば幸いです。

多宝如来　妙胤寺・経胤寺

妙胤寺の多宝如来立像

釈迦如来が霊鷲山で法華経を説いた時に、地中から宝塔を湧出させて、釈迦を讃美し、塔中に招き、半座をわけて二仏同座し、功徳皆真実なりと、法華経の功徳の大きいことを証明した仏である。妙胤寺の多宝如来は延宝3年（1675）に造立された94センチ・メートルの大型で姿のよい立像である。なお経胤寺にもあります。

六地蔵　吉祥寺



六地蔵（鎌倉市由比ヶ浜）

六道とは、地獄道（怒）、餓鬼道（慾）、畜生道（愚）、修羅道（闘争）、人間道・天上道（喜悦）をいう。六地蔵はこの六道の分身として信仰されるようになった。村の辻や寺の参道にあり、六地蔵も六道の輪廻転生する衆生を救い求めている。酒々井町には13基ある。

釈迦如来　妙胤寺・経胤寺

妙胤寺の釈迦如来立像

仏の代表であって、仏といえばお釈迦様というくらいである。石仏の造立は全国的に少なく、その理由は仏教の最高仏であるため、一般人には近寄り難いためかといわれており日蓮宗寺院に多い。酒々井町には妙胤寺に1基、経胤寺に3基ある。

如意輪観音　光徳院

如意宝珠と輪宝を持つ観音である。文字どおり意の如く金銀財宝、衣服、飲食を満たし、病苦を除く大変ありがたい仏様である。酒々井町には244基あるが、光徳院の如意輪観音は光背に裳裾が風になびいて、蝶の形になった珍しい如意輪観音である。

愛染明王　神明大神社

愛染明王は愛欲貪染で、人間が愛欲に溺れるのを浄化して、そのまま菩提の心に変えてくれる明王である。また、恋愛染着の仏として婦人や染物屋の信仰も受けていた。酒々井町にはこの1基のみである。

弁才天　厳島神社

弁財天はインドの河の神で水神・農業神として渡来されたといわれ衣食住や財宝を授かる神として信仰される。江戸時代になると七福神の一つとなった。酒々井町にはこの1基のみで、七福神になる以前の弁才天である。

双体道祖神　向根古谷

双体道祖神は、長野、山梨、静岡、群馬、神奈川の5県に限定されていて、他県には余り例がないといわれている。酒々井町には7ヶ所9組の双体道祖神がある。酒々井町の双体道祖神は男女のカップルが優しく体を寄せ、一本の杖を握る姿はほほえましい。縁を結び、夫婦和合、子授けの神として信仰されている。

庚申塔　向根古谷

庚申信仰は道教が伝えたもので、人間の身体の中には三尸（さんし）の虫（三鬼ともいわれ、人の頭・腹・足にいるといわれる）がいて、60日目ごとに巡ってくる庚申の夜は人が寝しずまると天に昇り、天帝（帝釈天）にその人の罪状を告げるので人間の寿命が縮まるのである。それゆえにその夜は庚申を祀って善事を行い、眠らずに飲食をして三尸の虫の機嫌をとり、昇天を防ぐという。この信仰は農村の娯楽性と習合して、村の年中行事化になった。

この石像は舟形光背に青面金剛像と三猿を刻んだものが普通である。まれに青面金剛、庚申塔と文字だけのものも見受けられる。酒々井町には17基あり、この向根古谷の庚申塔は青面金剛が左手で合掌、女人の髪を握ってぶら下げている珍しい庚申塔である。

庚申塔の各部名称

《郷土史講座》

「佐倉城下酒々井宿の繁栄」を受講して

木谷　靖

私が酒々井について興味を持ったのは、酒々井タウンカレッジにおける郷土研究会の髙木正浩氏の講座「しすい学」を受講した際、約2万年前に日本の人口が5千人といわれた時代に、酒々井に人が住んでいたといわれたことが驚きとともに、頭のなかに残ったのが発端となりました。その後、酒々井についてのさまざまな事柄を知りたいと思い、機会があるたびに本佐倉城跡の見学会や公民館主催の歴史講座などに参加させていただきました。今回の講座を受講して最初に思ったことは、なぜ、酒々井が徳川氏に取り立てられたのか、しかも浜宿湊がありながら新堀に新しい湊を作らせたのか、ということを考えさせられました。

徳川氏の立場から自分なりに考えてみました。それは本佐倉町(村)・酒々井町(村)が、千葉氏百年の永きにわたる統治の間に、城下町としての機能をある程度備えていた可能性があり、即ち、その当時に城下町として必要とされる商工業の種別による、ある程度の町割りが整っていたのではと考えられ、その機能の活用及び交通都市としての機能をも考慮し、佐倉道はもとより芝山、銚子道など、陸上のみならず海運としての役割も求めたのではないかと考えました。しかし、町域としては規模が小さく、戦国時代には必要とされた地形も入り組んでおり、現在の佐倉城へと移り、武家社会の機能が佐倉地域に移るにつれ、宿場町・民衆生活の町として残ってきたのではと考えました。あくまでも私見ですが・・・。

郷土史講座は人気のある講座の一つで今回は会場が一杯になる程の聴講者がありました。

次に、酒々井における三つの祭りと野馬捕りの行われた時期との関連性についての疑問があります。以前に読んだ郷土研究会会報（第144号）によると、大佐倉八幡神社の祭礼は7月に行われたとの記述があり、今回の講座では8月12日となっております。

佐倉牧の野馬捕りについても、町史による寛政12年「野馬御用日記」の記述では、7月20日より9月3日までの40日間になっており、寛政12年時の旧暦を現在の西暦に直すと、7月は8月20日より始まり、9月は10月18日から始まっています。和暦と現在の暦とでは、その年代によって使われた暦が違い、その辺のことを今後調べて見たいと思いました。

最近では江戸時代に最も近いと思われる明治13年の時の陸軍迅速図を継ぎ合わせて楽しんでおります。資料として残っていればもっと見たいものです。いずれにしても、昔の酒々井を考える時、いろいろなことが想像され、歴史の魅力を感じることができます。今後もこのような講座を期待しております。

酒々井の伝説＝お話その5＝

厳島山の隠れ里
～カンカンムロ～

新堀から突き出た小高い山は、厳島山と呼ばれています。ずうっと昔は、印旛沼がすぐそばまで広がっていました。厳島山の頂上には、弁天さまと住吉さまが祀られていて清々しい空気が漂っていました。そしてこの山の中腹には七つのほら穴があいていて、この中には尊い神様が住んでいると伝えられ、「厳島山の隠れ里」と呼ばれていました。

村の人たちが婚礼や弔いなどの人寄せの時、このほら穴の前で「お椀や皿を10人分貸してください」と頼みますと、不思議なことに翌朝には頼んだ人数分の立派な椀皿がきちんと揃えられていました。村の人たちはこれを大事に使ったあと、お礼を言ってほら穴の前に返して置くのでした。

ところがある時、村の長者が沢山のお椀や皿を借りたのですが、欲深か心が出て返しませんでした。それからは、もう誰がどんなに頼んでも貸してもらえなくなりました。ただその声だけが、ほら穴の中にカーンカーンとこだまするので、「カンカンムロ」と呼ばれるようになりました。

＝『印旛郡誌』より＝

※この椀貸し伝説も全国各地にありますが、近くでは栄町竜角寺にある岩屋古墳や佐倉市上勝田古墳にもあります。その伝説の舞台としては川、池、淵、沼、ほら穴や塚、古墳、岩などがあります。

川や淵など水にかかわりのあるところでは、貸し主はその主である竜神、乙姫、河童、大蛇などといわれていますが、塚やほら穴などでの貸し主はネズミという伝承が多く、昔話の「鼠の浄土（おむすびころりん）」につながるものがあります。これらの場所は、水の底にある竜宮や池の底などの異郷への出入り口と考えられ、こうした異郷から富や幸せがもたらされるという信仰から生まれたものと思われます。

このカンカンムロのほら穴は、7世紀ごろに死者を葬るために営まれた横穴とよばれる古墳の一種で、昭和22年にその内の一基が発掘され、見事な銅椀をはじめ勾玉、鉄刀、須恵器などが出土しています。

観察メモ

センニンソウ（仙人草）

白い十文状の花を咲かせます。4枚の花びらのように見えるのは、ガク片です。この花が咲き出すと夏休みは終りという思い出のある人もいるのではないでしょうか。

酒々井町内でも白いかたまりになっているのをよく見かけます。熟した実の先端に付く羽毛状の白く輝く毛を仙人のひげにみたて「仙人草」という名前がついたともいわれています。

秋景色の中、仙人のひげを探しに出かけてはいかがでしょうか。

（野草部）

名勝探訪

根津神社から六義園へ

12月5日（水）
雨天代替日12月10日（月）

根津神社は、日本武尊が千駄木の地に創紀した古社。江戸時代、徳川綱吉が現在地に社殿を奉建したもので、権現造りの本殿や楼門のすべてが欠けずに現存し、国の重要文化財に指定されている。＝写真＝

六義園は、元禄15年川越藩主柳沢吉保が自ら設計指揮し、7年をかけて完成した回遊式築山泉水庭園で、国の特別名勝に指定されている。

根津から駒込まで約4キロ・メートル、その間に3社、5寺院が点在している。また、本郷通り交差点一帯は、かつて、江戸三大市場の一つで土物店があり、土のついた野菜が取引された、いわゆる「やっちゃば」である。さらに北に進むと駒込名主屋敷がある。駒込の草分け高木家の屋敷で、母屋は享保2年（1717）の再建で、表門はそれより更に古い。

これらのすべてを見学することはできませんが、その中のいくつかを訪ねて、江戸文化のルーツに触れてみたいと思います。

「中世寺院の山林支配」を聴いて

T・O生

去る8月26日の暑い日、成田里山を育てる会主催の講演を聴いた。テーマは標記のとおりで講師は山武市宝聚寺住職の濱名徳順氏。仏教美術史を得意とする歴史家で、県内各地で仏教文化の講演をしており、「北総の名刹巡礼」の著者である。

講話の内容はおおよそ次のとおりである。

★中世とは平安時代末期から戦国時代までをいい、それ以前は古代。

★平安末期に荘園公領制が成立し、各地域に武士団が生まれ、それぞれ地域づくりを行なった。

★武士団などの地元有力者が寺院を造成し、かつ僧侶の育成までして寺院も次第に山から里山に近づき、植林などを積極的に進めた。

★土地利用や水利、たき木などの燃料供給に至るまで、寺院が地域の公益性や環境に配慮した重要な役割を果たしてきた。いわゆる寺と山林と集落が一体化されてきた。

★寺の山林支配によって寺山から吹いてくる夏の風が非常に涼しく、集落全体を癒している。

★円覚寺米銭納下帳（弘安6年）によると、鎌倉円覚寺は上総亀山郷に所領を有していて米百石（二百五十俵）が生産され、他に木炭、薪、大豆の収入が寺院経営の一助となっていた。

★中世武士団が寺院に一族を入れた身近な例として千葉胤貞は父宗胤の所領であった中山法華経寺に子日祐（中興の祖）を入れて所領を与え、戦さに赴く自身の安泰と、万一の際の供養など任せたという、武士と寺院の結びつきの話など興味深い講話であった。

日帰り見学会

「笠森観音」方面

10月15日（月）
（雨天決行）

「笠森寺」は天台宗別格大本山で坂東三十一番札所です。

寺伝によれば、延暦3年（784）に最澄（伝教大師）が楠の霊木で十一面観音菩薩を刻み安置、開基したことにより、笠森観音と通称されています。大岩の上にそびえる観音堂は、61本の柱で支えられた四方懸造と呼ばれる特異な建築方式で、重要文化財です。

「十万石本陣」で昼食をして、房総の小江戸といわれている大多喜城下町を散策します。天正18年（1590）に本多忠勝が大多喜城に入ると、城下町を整備していきます。ガイドの案内により、多くの商家や寺、神社など見学したあと帰途に着きたいと思います。

あとがき

★：夏の記録的な猛暑に続き、9月も連日30度を超す厳しい残暑が続くなど、いつにも増して体に応えた夏でした。パラリンピック・ロンドン大会で活躍する選手の皆さんの、ゴールの瞬間に湧き上がる笑顔と涙。達成感が伝わってきて元気をもらいました。郷土研の会員の皆様は如何お過ごしでしょうか。近況・随想・ご要望などお寄せください。公民館受付前に設置してあるラックの引き出し「酒々井町郷土研究会」の中にお入れくださるか、最寄りの役員にお渡しください。

★：年々月日が早く過ぎていくのを感じます。今年もはや3ヶ月を残すだけとなりました。別記のとおり行事を計画しておりますのでできるだけ行事に参加していただき、楽しい時間をご一緒いたしましょう。

郷土研日誌（抜粋）

月日	内容	参加者
6月26日	会報（145号）印刷	6
29日	会報（145号）発送	17
7月7日	史談会（中世の佐倉8）	26
17日	郷土史講座準備打合せ	17
8月4日	史談会（中世の佐倉9）	26
6日	住民協働交流会	1
7日	研修部会	6
19日	郷土史講座	70
28日	運営委員会	16
31日	会報（146号）編集会議	6
9月1日	史談会（中世の佐倉10）	27
4日	文化協会理事会	1
5日	名勝探訪下見（両国方面）	5
7日	会報編集会議	6
12日	名勝探訪（両国方面）	25
14日	会報編集会議	6
18日	役員研修会	15
20日	野草観察会下見	4
21日	会報編集会議	6

郷土研行事案内

平成24年10月～12月

	10月	11月	12月
史談会	6日（土）13:30 中央公民館会議室 「中世の佐倉」⑪ 講師：高橋健一先生	休講	1日（土）13:30 中央公民館会議室 「中世の佐倉」⑫ 講師：高橋健一先生

日帰り見学会

「笠森観音」方面

10月15日（月）　雨天決行

集合時刻・場所　8：50　中央公民館前

参加費　1500円　（昼食代含む）

＜町バスを利用＞

コース　中央公民館―笠森観音―十万石本陣（昼食）―大多喜城下を散策
（現地ガイドあり、なお大多喜城には行きません）
―中央公民館（16：30頃帰着予定）

（一部コースに変更の場合あり）

＜申込受付＞　中央公民館ロビーにて

10月9日（火）　9：00　から、先着33名です。

問合せ　寺本（496-1379）まで

名勝探訪

「根津神社」方面

12月5日（水）　雨天代替日　12月10日(月)

集合時刻・場所　8：00　京成酒々井駅　改札口前

参加費　250円（資料代と入園料）

※交通費各自負担

コース　京成酒々井駅▬▬町屋駅▬▬(千代田線)根津駅…根津神社

…目赤不動尊…六義園（入園後解散・自由昼食）

（一部コースに変更の場合あり）

問合せ　岡田（496-0074）まで

★・・・季節の変わる中、春の七草たちは出番を待っています。例年どおり「七草粥を食べる会」を平成25年2月15日（金）に開催を予定しています。楽しみにしていてください。　（野草部）・・・★